

相模原事件について想う

障害者差別の確信犯

七月二六日未明、相模原市の津久井やまゆり園に侵入した元職員が、そこで暮らす障害者を刃物などで襲い、十九人を殺害、二六人に重軽傷を負わせました。特に狙われたのが抵抗できない重度の重複障害者でした。

報道によると、元職員は「意思疎通できない障害者は生きる価値がない。安楽死させることが社会のため」「障害者に金を使うのはムダ」など主張。衆院議長宛手紙で「障害者を安楽死させる法律を

作れ」と要求しています。

障害者を差別・抹殺すること「社会正義」と正当化し、用意周到に準備して凶行に及んだ確信犯です。表現できない憤り、衝撃を受けました。

優生政策・ヘイトが横行するこの国で

事件を知って浮かんできたのがナチス・ヒットラー。そしてこの国の悪質な、代表的政治家たちの言葉でした。かつて石原都知事は重度障害者施設を視察し「この人達って生きてる意味があるのか」と

いう趣旨の発言をしました。大臣もやった渡辺美智雄は「老人に金をかけるのは枯れ木に水をやるようなもの」と放言。

彼らが隠しもしなかった優生思想を、元職員は実際の行為に移したのだと感じました。「生きるに値しない生命」として約七万人の障害者を「安楽死計画」のもと虐殺したナチス・ヒットラーにも学んで…。

国は医学会・医療産業と結託し「生きる価値ある命」と「無い命」の線引き・選別を胎児の段階

で行う優生政策を推進してきました。臓器移植法も安楽死法案もこの思想でつながっています。

労働現場でも学校でも、社会の方々に「非正規」「負け組」「下流」が平然と虐げられ、生きる手段も、場も奪われていきます。ヘイトデモでは在日の人々、外国人に対して「死ぬ」「殺せ」という怒号、ネット上でもこんな言葉が飛びかっています。※ヘイトクライム≡憎悪犯罪

いつ第二、第三の「元職員」が登場するかもし

れないと、多くの障害者・家族や関係者が危惧し、恐怖を感じています。

なぜ介護職が虐殺者に？

元職員は障害者が生きている現場で、直接介護に関わる中で、障害者への差別意識を強めてきたことが伺えます。これは、特に当事者にとってショックで恐ろしいことです。

彼のように障害者や高齢者の命は「価値がない」「税金の無駄つかい」「死ぬのが社会の為」という価値観や考え方に染まる介護職が現れる土壌が介護現場の中にもあることを示しているからです。

今日までの障害者・高齢者の介護、福祉や医療全体の在り方、その背景にある価値観、思想、政治や社会全体のあり方を多方面から、根底的に検証することが問われています。一人ひとりに問われていると痛感します。

精神障害者への

偏見と差別を煽るな

報道の基調は次のストーリーです。容疑者は「大麻精神病」「妄想性障害」だ、措置入院後の対応がまずかった、だからこの事件を防げなかった。

この脈絡で政府の発言、行政や警察の対応、施設での防犯訓練や設備の点

検、識者のコメントなどが報じられています。これは変です。彼は大麻や精神病が原因で障害者虐殺をしたのか？違います。

この事件を、精神病者の犯罪、措置入院制度の欠陥として扱うことは問題のすり替えです。精神障害者への差別と偏見をあおるものです。措置入院後の警察や自治体との連携強化など法改定が取りざたされていますが、

精神障害者や良心的医師は危惧や怒りを表明しています。「精神障害者と共に生きる社会」ではなく、「精神障害者を排除・隔離・抹殺する社会」へと向かわせる動きだから

です。入所の障害者と精神障害者を対立させ分断するものでもあります。

国にとって不都合な人々を「社会に有害な存在」として隔離・収容・抹殺していく「保安処分」とも連動する攻撃です。

障害者差別、分断を許さず、障害者・高齢者とともに「誰にとっても安心できる介護・福祉」をめざしたい。その為にはこの事件は他人事ではないし、避けて通れません。事件の本質、問いかけるものを掘りさげ、共に考えていきたいと思います。

南労会支部 ○